

『正しく生きる』

脚本 福岡芳穂
第1稿 2012/9/30

登場人物

柳田周（71）

各務いつか（21）

内田圭（19）

村上桜（20）

佐伯朝雄（19）

森優樹（19）

各務遥（5）いつかの娘

各務泰志（39）いつかの夫

阿部未夢（19）朝雄の内縁の妻

白石健彦（71）柳田の友人

金子勲（44）圭たちに監禁される暴力団幹部

佐々木浩介（34）いつかの勤める弁当屋の店長

久保田（23）朝雄の先輩

牧野紀晴（77）柳田の勤める芸大の理事長

村上創平（54）柳田の勤める芸大の学長桜の父親

池澤（47）芸大学科長桜の担当教授

矢野（52）芸大副学長

美術出版社の記者

保護司・山口

小児科の医師

カラオケ屋の店員

カラオケ屋の若い男客たち

○少年院・レクリエーションルーム

ジャージ姿で坊主頭の少年たち、制服姿の職員たちが、呆然とテレビを見つめている。

テレビからは、ある地域を襲った地震と大津波に関する緊急ニュースが流れていて。(※この映画の中における『震災』はあくまで架空の事態であり、故にこういったニュース素材に関しても新たに状況を設定して創作することが前提である。また、今回のシナリオ上に『テレビ報道』が表記された場合、それは視覚的なものではなく音声のみの表現となる) 誰一人口を開くものはいない。皆が固まったようにじっと画面から目を離せない。

ひとり、そつとその場を離れる少年、内田圭(19)。

○同・事務室

圭が走ってくる、机に向かっていった職員に声をかける。

職員「廊下は走るなよ」

圭「すみません。電話、かきたいんですが」

職員「(立ち上がって、電話を圭のほうに持っていきながら) え…

と、ごめん君、名前なんだっけ? 入ったばかりだよな」

圭「内田…内田圭です」

職員「(ノートを差し出し) どの誰に…と、理由を…」

圭「津波のところに知り合いが…姉ちゃんがいるんで」

バタバタと足音を立てて別の職員が走ってくる。

職員「…津波?」

別の職員「たいへんだ」

職員「え?」

別の職員「いや…ニュース…」

同僚を引っ張ってレクリエーションルームの方に駆け去る。

圭「…」

受話器を取り上げ、電話のプッシュボタンを押す。しばらく待つが相手が出ないようで、舌打ちをする。と再び番号を押す。

○××造形芸術大学・アートクリエイイト学科・研究室

数人の教職員が呆然とテレビを見つめている。テレビから流れている緊急ニュースの音声以外には何も聞こえない。誰一人身動きすることもなく。ひとり、テレビ画面から目を逸らし静かにその場を離れる男、柳田周（71）。

○同・一角

片隅に設置された公衆電話のところに柳田がやってくる。財布からテレホンカードを抜き出し、電話をかけ始める。

柳田「…」

○薄闇の迫る土手

全身ずぶ濡れで着衣も乱れている若い女が、小さな女の子を両手で固く抱きかかえ立ち尽くしている。大気の咆哮のような、或いは巨大なものが地を這いまわるような音が周囲を包んでいて。今まさに長い距離を全力疾走してきたかのように女の呼吸は激しく、ただ茫然と目を見開いている。軽快な音楽が鳴る。それは、女のポケットに入っていた携帯電話の着信音：女Ⅱ各務いつか（21）が震える手で濡れた携帯を取り出す。割れて汚れた液晶ディスプレイに、見覚えのない着信表示が点滅している。

いつか「…」

携帯の表示から周囲へと目をやり、そして空を見上

げる。

着信音が途切れる。

いつかが、迸り出る叫びを抑えるように自分の手首を口に当て激しく噛む。滲む血。洩れる嗚咽。

その顔が、暮れきる前の強い残光を受けている。

大きな、嘘のような虹が空にかかっている。

○ 黒い画面

に、「それから10か月後」というテロップ。

○ XX造形芸術大学・教室

広いアトリエのような教室。授業中。10数人の学生がそれぞれにオブジェ制作をしている。

柳田がその間を歩きながら短い批評を加えていく。

他の学生に対する批評を冷ややかな笑みを浮かべて聞きながら自分の制作に向かい合っている女子学生、

村上桜（20）。

その前に静かに柳田が立つ。顔を上げ柳田を見る桜。笑いが消える。

柳田が桜のオブジェを手に取り、そのまま床に落とす。砕け散るオブジェ。

桜「…」

教室中が息を詰める。

柳田、表情を変えずに教室を出て行く。

その後ろ姿を凝視めたまま動かない桜。

誰も桜に近づこうとしない。「…やるなあ」「チヨーわがまま同士の激突：」「しっ」といった囁きや薄笑いが片隅から聞こえてきて。

○ 走る電車

やや混んでいる車内。

優先席の前に立つ柳田。そこには学生風の若い男女が座って携帯のゲームなどを楽しんでいる。いきなり声を上げてその若者たちを罵倒し始める柳田。反抗的な態度の男を女がなだめるように2人が席を立つ。そこに座って、目を閉じる柳田。

○街・弁当屋

柳田が店頭で注文の来るのを待っている。

奥から店員の若い女が現れ、手にしていた品物を笑顔で手渡す。その女は、いつか。

いつか「どうもお待たせしました。毎度ありがとうございます」
黙ったままそれを受け取ると、立ち去る柳田。

いつか「ありがとうございます」
レジを閉めようとして、ふ、と中の札束に目を留める。

いつか「…」

動きが止まっている。

奥から見ていた店長の佐々木浩介（31）が声をかける。

佐々木「大丈夫？」

いつか「…え？」

佐々木「いや」

いつか「え」

佐々木「あ、いや…（笑う）」

レジを閉めるいつか。

佐々木「ライス、セットしてもらえます」

いつか「（笑顔で）はい」

重い米袋を持ち上げ、大きな釜に米を入れると冷たい水で洗っていくいつか。その額に汗。

佐々木「それ終わったら上がっちゃってください。時間なんで」
いつか「はい」

振り向くと、二人分の弁当を入れたビニール袋をこ

つちに差し出すようしながら、佐々木が微笑んでい
て。

いつか「ちよっと頭を下げ」…」

再び作業に戻る。

○住宅街の一角・柳田の家

弁当の入ったビニール袋を提げ歩く柳田。一軒の家
の前で立ち止まり、ポケットから鍵束を取り出す。
古ぼけた平屋、或いは倉庫のようにも見える建物。
いくつもの鍵を開け終える柳田。息を整えるように
やや動きを止め、一気に扉を開けて中に入る。

○同・中

柳田はビニール袋をテーブルの上に置くとガスコン
ロに火をつけ湯を沸かし始める。

そこは「生活空間」というよりは柳田の「アトリエ」
なのだろう。作業台として使っているらしい大きな
テーブルを覆った布には画材の汚れが染みつき、そ
ここに作りかけのオブジェや完成された作品が置
かれてある。隅には粗末な簡易ベッド。

しかし、乱雑な印象はなく、それなりの秩序がその
空間を埋めている。生活用品は最低限のものしかな
い。心地よい居住空間ではなく、厳しい自己抑制を
伴った、表現のための空間。

さまざまな本を収めている棚に並んだ過去の個展の
図録や何冊もの『柳田周作品集』。

壁に貼られた、新しい個展のポスター。場所は東京、
日付は1か月後を示している。その脇のカレンダー
には細々と几帳面な文字で予定が書き込まれていて。
薬缶から上がる湯気に手をかざしていた柳田が口を
押えてシンクに顔を伏せる。軽い嘔吐。

歯茎を指で押すとその指に付着するどす黒い血。

なんでもないことのように手近にあった布でそれを拭き取り、奥のドアへと向かう。
施錠されていたそのドアを開けると、そこには厚手のビニールで何重もの壁のようなものが設置されている。脇のロッカーから白い防護服を取り出して着替える柳田。
お茶を淹れ、カップを手にした防護服の柳田がビニールの壁の奥に進む。
そこにある作業台の上に置かれた、クリスタルの輝きを放つ奇妙な形のオブジェ。
その前に座り、工具を取り出すと制作作業を開始する柳田。

○街の片隅

人目につかない一角、道に面した路地の角に身を潜めるように立っている佐伯朝雄（19）と森優樹（19）。寒い時期なのに二人は薄手の作業服しか着ていない。通りかかる若者二人にいきなり襲いかかる朝雄と優樹、そのまま路地の裏手の空間に連れ込む。

固まる若者二人。その背後を塞ぐように、同じ作業服姿の圭が現れる。

圭と朝雄は坊主頭、優樹は中途半端なスポーツ刈り。

朝雄「…（にこにこ笑いながら若者たちに）びっくりした？」

若者A「…（びくつきながら首をカクカクと上下に）」

朝雄「ってか実はね、ボクら漫才やってるんで、ちょっとそれ見て欲しいんですよ。時間とか大丈夫？」

若者A「…（さつきと同様にカクカクと首を上下に）」

朝雄「（優樹と目を見合わせ）…」

朝雄と優樹で漫才を始める。ネタも面白く二人の息もピッタリで、若者たちの表情があっという間に緩み、笑いが弾ける。

オチで締めた瞬間拍手喝采の若者たち…に飛び掛かる朝雄、優樹、圭。若者たちを叩きのめして携帯と

財布を取り上げ、服を剥ぎ取って着替えていく。すぐに奪った携帯に番号を打ち込んでいく朝雄と圭。朝雄「…あ、久保田くんつか、朝雄です…あ、いやちょっと早めに出てきちゃったんすけどお…」
圭の電話は、相手が出ないよう。

○カラオケ屋・個室

いつかがひとりで、ウーロンハイなどを飲みながら歌っている。
傍らには1人分だけ開けられた弁当。それをつまみながら。

○とあるマンションの地下駐車場

隅の薄暗がりに停められた高級車の脇に立っている朝雄たち三人。
車の助手席に座ったままの男、久保田（23）から三台の新しい携帯を渡される。頭を下げる三人。
久保田は、朝雄たちが奪った携帯を受け取り後部座席に投げ込みながら、

久保田「働くんだったら斉藤んところに行けよ。電話しといてやるから」

朝雄「新しい携帯をいじりながら）斉藤くんって今なにしてるんだしたっけ」

久保田「交通警備の会社。工事とかの脇で車止めたり流したりするヤツな。あいつんところは社宅完備っつかアパートもあるし」

朝雄「おすおす」

久保田「おすおすじゃねえよ朝雄。（優樹を指し）そっちの二人か」

朝雄「ってか、ツルんでるとヤバいし、とりあえず俺一人で」

優樹「（不安げに朝雄を見て）…」

久保田「…（優樹の髪形を見て）お前、ひよっとして出所間近と

かだったんじゃないの？」

優樹「…（頷き）まあ」

久保田「…（優樹から圭へと目を移し）そっちは」

朝雄「こいつはとりあえず急ぎで行かなきゃいけないところがあるんで、手っ取り早く金か車が欲しいんですけど」

圭「…」

久保田「…（しばらく圭を見、後部座席をこなす）」

車の後部座席に乗り込む圭。

車が発進しようとする。

朝雄「久保田くん」

車が止まる。助手席から腕を出し1万円札を2枚差し出す久保田。

久保田「…また連絡するわ」

朝雄「前言った芸能プロダクションのほうもよろしくです。俺ら漫才で頑張るんで」

久保田軽く片手を挙げ、車が発進する。

朝雄「久保田くん！」

走り去る車。

朝雄「（腰を深く折り）あざーす！」

〇XX造形芸術大学・会議室

大学の主要執行部が揃っての会議。理事長の牧野紀晴（77）、学長の村上創平（54）、副学長の矢野（58）、学科長の池澤（47）、他10名程の教授や職員などが出席している。

教授A「学生の作品を故意に破壊するというのは相当にまずいんじゃないですか」

池澤「それはやっぱり、故意に、ということなんでしょうか？ た

またま取り落とされたとか…」

教授A「わざとに決まってるじゃないですか。柳田先生ですよ」
出席者たちから笑いが洩れる。

教授B「作品をたまたま取り落とされる、っていうのもたまらな
いですね。柳田さんもアーティストなわけですからたま

たま壊しちゃうっていうことはあり得ない」

職員 A 「あの、柳田先生ここ2か月ほど体調もおよろしくなくいらしくて、休講もたびたび…」

教授 A 「だから健康面でも職務がつかなくなってるっしやるってことですよ」

教授 C 「柳田先生って以前から、皆勤賞の学生に単位を与えなかったり、面談に行った学生の質問に一切応えずに自分の制作を続けてたりとか…なんかそういう話多いですね」

池澤 「それは彼独特の指導なんじゃないですか」

教授 B 「そういった独断的な指導法を見直す時期なんですよ、今は。学生や保護者が納得しない」

矢野 「まあしかし柳田先生はやはりアーティストとしては超一流であるわけだし、この大学にお呼びした際にも理事長自ら三顧の礼をもってお迎えした経緯もありますしね」

村上 「そこまでのバリューが今の柳田さんにあるでしょうか」

一同が沈黙する。

村上 「昔の柳田さんとは違う」

池澤 「…しかし学長、来月開催の12年ぶりの個展にはアート業界も注目してます。今また柳田周が評価される時代が…」

村上 「逆の評価を受ける場合もあるかもしれません。柳田周はもはや死んだという決定的な評価を。今の注目はやや不自然な…物珍しさが先行してるような気がします。ともあれ、表現者としてはなく、教育者としての自覚をお持ちでなく、その職務遂行に支障を生じるのであれば、年度の途中であっても退職頂くというのが大学の対応として正当なのではないのでしょうか」

池澤 「ただひとつだけ、配慮があってもいいと思うのは…皆さんご存知のことですが柳田先生のご家族、お孫さんのご一家が津波の時の原発事故で亡くなられていて…あの被曝事故の被害者で…柳田先生はそんな失意の中から現在立ち直られようとしてるんだと…（皆の視線を見て、その先を振り向く）」

理事長の牧野が、それ以上の発言を留めるように、

右手を挙げていて。

牧野を見ていた全員がそれぞれに視線を逸らし、先ほどよりさらに深い沈黙に支配される。

矢野「…あ、えー…ではこの議案は継続的に検討というか…（牧野や村上の顔を窺いながら）えー、とりあえず学長と私の預かりと、いうことでよろしいでしょうか」

○同・表の廊下

壁際に凭れて立っている桜。

村上が会議の書類を抱えて出てくる。桜を一瞥するが、そのまま歩き去る。

桜は、睨むようにその後ろ姿を追って。

そこに池澤が出てくる。

池澤「（桜に近づき、村上の後ろ姿をこなし）まいったね。君のお父さん完全に強硬姿勢だ。いまやめさせることはないと思うんだけどね俺は。学生の作品を壊したくらいで…（桜を見て）…ってことじゃないよな。ごめん」

桜「結局どうなりそうなんですか」

池澤「…理事長は柳田擁護だろうね。ただ学長の論旨は明解だ。

雰囲気的にも学内で柳田さんをかばう人間はいない。…

お父さんが理事長をどう押し切るか…」

言葉の途中で、桜がその場を離れ歩き去る。

池澤「…」

○柳田の家

奥の作業場で防護服に身を包み、制作に没頭している柳田。

蓄積被曝の影響があらわれている（※要取材）。表現者の顔で、集中して繊細な作業を続ける。

○街・玩具屋

朝雄が、商品を手にした店員と話している。

朝雄「だから予算は2万円だ、つってんじゃない。それじゃ2万円にならないじゃん」

店員「申し訳ございません、(別の商品を指し)ではあとこれなんかはいかがでございましょう」

朝雄「それじゃ2万超すだろ。つてか生まれたばかりの子どもにそれムリじゃね」

店員「ですよ、少々お待ちくださいませ」

そこに優樹が入ってくる。

優樹「バイト決めてきた」

朝雄「(店員の動きを追いながら)そう」

優樹「たまたまそのカラオケ屋で張り紙してたから」

朝雄「なんか面倒なこと聞かれなかった？」

優樹「うんまあ…(笑って)適当なこと言っただけ」

朝雄「(包装していた別の店員に)ちよつとそれもつと丁寧に包んでくんね。あ、つてかりボンやっぱピンクじゃなくて緑にしとこうかな、男か女かわかんないし。希望的には女なんだけどさ(笑う)緑だと無難だよ。でもない？」

○未夢のアパート・表

物陰に潜み、周囲を気にしている朝雄、その傍らに優樹。優樹は玩具屋の大きな紙袋を抱えていて。

朝雄「…いねえよな、誰も」

優樹「多分」

朝雄「多分じゃねえだろ、つっの」

優樹から紙袋を奪い、アパートの一室に向かう。従う優樹。

朝雄、あるドアの前に立ち、覗き穴から逆に中を見たりして、一瞬また周囲を見回したのちに満面の笑顔になってドアチャイムを押す。

○同・室内

阿部未夢（19）が小さなテーブルの前に座り、100円ショップで買ったような小さな鏡に向かって化粧をしている。ドアチャイムの音。に続いて、声が聞こえる。

朝雄の声「宅配便です」

未夢「…」

立ち上がり、音を立てないように急いでドアに向かって、除き穴から外を見る。

未夢「…」

脇のキッチンに行き、包丁や果物ナイフなどを取る
と別の棚の奥に隠す。

再びドアチャイムが鳴る。

未夢「…はーい」

ドアを、開ける。

朝雄と優樹がいる。

朝雄「おう」

未夢「…かなり早いんじゃない？ 予定より」

朝雄「女の子！…ピンポン！…って、あれ、違う？ 男か（未

夢を押し退けるように中に入りながら）」

未夢「…」

質素だが女の子らしいレイアウト、小ぎれいに片づけられた1DKの狭い部屋。玩具屋の袋を抱えたまま寝室に向かう朝雄、部屋の中を見回して、

朝雄「…あれ？…（未夢を見る）」

未夢「…（キッチンに）お茶とか飲む？」

朝雄「じゃなくて」

優樹も入ってきて、ドアを閉める。

未夢「（優樹に）もしかして脱走？」

優樹「（目を逸らして頷く）…」

朝雄「じゃなくて」

未夢「（朝雄に）今からアタシ、バイトなんだ」

朝雄「じゃなくて！」

未夢「ごめん…流産しちゃった」

朝雄「なにそれ」

未夢「だから手紙も、ずっと出せなかった」
朝雄「…そう」

小さなテーブルの脇に座る。

未夢「…」

優樹「…」

朝雄がいきなりテーブルをひっくり返す。そのあたりの物を手当たり次第投げると未夢を引きずり回し馬乗りになって、手近にあったハサミを突き付ける。

朝雄「…」

荒い息でハサミを突き付けている朝雄の手が震えている。

優樹「(入り口に立ったまま)…」

未夢「(目を瞑る)…」

朝雄の力が抜け、ハサミを放り投げる。

優樹がそっと部屋を出て行く。

朝雄「ってゆーか…お前は大丈夫なの？」

未夢「…え？」

朝雄「身体とか大丈夫なの？」

未夢「…」

未夢の眼から涙が溢れてくる。

滅茶滅茶になった部屋の中で、嗚咽する未夢を抱き

かかえ、頭と腹を撫でる朝雄。

朝雄「あ…ちよっと一瞬金貸しといてくんね？」

○同・表

入口の脇に座って煙草を喫いながら、小声で漫才のネタを繰り返している優樹。

朝雄が出てくると、手にしていた安っぽいダウンベストを手渡す。

朝雄「あいつのだから小っちゃええかも」

廊下の床で煙草を消し、ベストを着る優樹。

朝雄はさらにポケットから5、6枚の千円札を取り出すと、2枚を優樹に渡す。

朝雄「汚すなっつんだよ」

と、優樹の吸い殻を拾い、歩き出す。追う優樹。

○いつかのアパート（夜）

1DKくらいの狭い部屋。やや乱雑にものが散らかっている。

奥の部屋で、いつかと佐々木がセックスしている。激しく動き、果てる佐々木。

手前の部屋のテーブルの下：小さな女の子Ⅱ遥（5）がいて、紙にクレヨンで何かを描いている。

奥の部屋からは小さな笑い声や服を着る音が聞こえてきている。

遥の傍らには、いつかが持ち帰った弁当が半分ほど残されていて。遥の口元には食べ物汚れ。

服を着た佐々木がドアの方に向かう。が、途中でポケットから安い菓子を取り出し、テーブルの下の遥に向かって座り込む。

佐々木「（お菓子を差し出し）…」

手を出さない遥。

佐々木「（笑顔で遥の口元をそっと拭いてやり）こっちに置いとくから、あとで食べな」

テーブルの上に菓子を置き、奥の部屋から出てきたいつかに声をかける。

佐々木「じゃ明日。お疲れさん」

いつか「（少し笑って頷き）…お疲れ様でした」
出て行く佐々木。

ドアに鍵をかけたいつか、テーブル上の菓子を床に投げつけると、遥の前にしゃがみ込む。

いつか「死ねよ」

絵を描き続けている遥。

いつかが手を伸ばし遥を殴る。

いつか「死んじやえよお前」

泣きもせず、いつかを見つめる遥。

さらに殴るいつか。

いつか「…」

立ち上がると椅子に座り、そこに放り出してあったバッグから二つの携帯電話を取り出す。

煙草に火をつけながら、傷だらけでディスプレイ画面も割れている古い携帯のほうの電源を入れ、アドレス帳を開く。

そこにあるひとつの番号に、新しい方の携帯から電話をかける。相手が出る。

電話の声「もしもし…もしもし」

黙っているいつか。電話が切られる。その番号を新しい携帯に登録する。古い携帯のアドレス帳にある次の番号に電話する。使われていないというメッセージ。そのままその番号を消去する。…ということ、繰り返す。

いつのまにか、テーブルの下で遙が、床に散らばった佐々木の菓子を食べている。

水道の蛇口から、パッキンが緩んでいるのかゆっくりと、水が滴っていて。

○同（昼間）

ひとりでいつかが床に座り、絵を描いている。

傍らには昨夜の弁当がほぼ食べ終えられていて。

遙の周りには、描いた絵が何枚も並べられている。

それらは全て、暗色に塗り固められた絵。遙の中の津波の記憶なのかもしれない。

水道の蛇口からゆっくりと水が滴り。

遙の口元は汚れていて。

○弁当屋

いつかが忙しく働いている。額の汗。

店の電話が鳴り、手を拭きながらいつかが受話器を

取る。

いつか「はい、毎度ありがとうございます○○です…あ、はい、少々お待ちください。(奥に向かって)店長、お宅からお電話です」

奥から出てくる店長、エプロンを外しポケットから財布や煙草を取り出すと、煙草だけ持っていつから受話器を受け取る。

佐々木「ありがとう…もしもし…あ、大丈夫…」

裏手に行つて煙草に火をつける佐々木。

作業台の上に置かれたままの佐々木の財布。

いつか「…」

電話しながらへらへらと笑っている佐々木。

いつかがそつと佐々木の財布から千円札を数枚抜き取り、再び仕事を続ける。

○XX造形芸術大学・教室

柳田の制作の授業。

壁に凭れ立ったままじっと目を閉じている柳田。

桜を含めて数人の学生しか教室にはおらず、さらに帰り支度をしている学生もいて。

一人の学生が柳田に近づき静かに声をかける。

学生「先生、授業時間終わってますけど」

目を開ける柳田、周囲を見渡し、少し咳き込む。口

元を拭うときに、口内に滲んだ血が見える。

学生「…血」

柳田「ん？」

学生「(柳田の口を指し)血」

柳田「…」

口を押さえ、教室を出て行く。

見ていた桜。

○同・トイレ

柳田がうがいをする。何度も。

○同・屋上庭園のような一角

ベンチが設えられていて。そこに座っている柳田と美術出版社の女性記者。ICレコーダーで録音しながら時折カメラで柳田を撮る。

記者「これまでの先生の個展には全て、非常に攻撃的で、ある種の犯罪性をも連想させるようなタイトルが必ず設定されていて、その言葉がまた我々を挑発し刺激し、作品を拝見する際に想像力を掻き立てられたということがありました。ただ今回の個展にはそういったタイトル、言葉がつけられていない。何故でしょう」

柳田「…どう…かな」

離れたところでそれを見つめている桜。

記者「あの津波以降、すべての言葉は失われてしまった、或いは言葉の持つ力を我々自身が信じられなくなってしまったという言い方がありませんね」

柳田「…あなたもそうなのかね？」

記者「…はつきりお聞きます。先生ご自身のお孫さんご夫婦とその小さなお子さんが津波の際の原発事故の際に、政府や電力会社の不適切な指示が原因で被曝して亡くなられました。23人が亡くなった例の不幸な事故、私なんかは人災、犯罪であるとすら思っています。その後もなんら原発行政に変化はないしあの事故も以前ほど取り上げられることはなくなりました。そういったことに対する反逆、或いは復讐心といったものが、12年振りに柳田周のモチベーションになったのでは？」

桜とは別の方角から村上が現れ、柳田たちの方に目をやって煙草に火をつける。

柳田「…人の死も芸術も、世界はすぐに忘れ去っていく。柳田周という名前などもはやどこにも残ってはいない。あれたちの死も、23人というさして大きくもない数字の中に埋もれてしまう」

桜が村上に気づき、そちらの方へ近づいていく。

記者「全ての記憶が人間を、世界を形づくっていくのだとすれば、

ひとりひとりの死も数ではなく一個一個のものとして語り続けられねばならないし、芸術も決して忘れ去られるべきものではないと私も思います」

近づいてきた桜に気づく村上。

桜「(柳田の方を)なし」 気になってるの?」

村上「ここでもしか煙草が喫えないんだ。知ってるだろ」

傍らに設置されてある灰皿に煙草を落とし、去ろうとする。

桜「柳田をクビにできないのは理事長が怖いから?」

村上「…(答えずに去る)」

桜「それとも芸術家として柳田周には敵わないと思ってるから?」
足を止める村上。

村上「立ち止まらずに、常に新しい何かを創造し続けるというの

は、とても難しい(柳田の方に目をやる)」

桜「…」

村上「芸術に、お前が期待している力は、もうないのかもしれないな

い」

桜「芸術に、じゃなくて、あんたにもう力がないんだよ」

村上、少し桜を見つめ、立ち去る。

柳田「私は…」

記者「はい」

柳田「…世界は…もうすぐ終わる」

記者「…恐縮です。どういう意味でしょうか」

○走る電車

車内。座って目を閉じている柳田。

離れたところでそれを見ている桜。

○高級ホテル

のエントランスを歩いていく柳田。

やや距離を置いて後を追う桜。

○同・バー

柳田、入り口に立っているフロントマネージャーに少し耳打ちをして、中に入っていく。

桜が入り口に向かう、が、慇懃な笑みを浮かべたマネージャーから拒否の姿勢を取られる。

桜「……」

○同・中

座っている柳田と、白石健彦（71）。

柳田「俺はあとどれくらいだ？」

白石「（笑って）だから俺は医者じゃないって言ってるだろ」

柳田「……」

白石「……前に言ってた症状は酷くなってるか？」

柳田「（頷く）……」

白石「いま一日どのくらいの時間あれと向き合ってるんだ」

柳田「7、8時間。最後の仕上げなんだ」

白石「個展までもたないかもしれない。ただあくまで放射能の専門家としての見解だ。またウチの研究室で検査してみるか」

柳田「その時間がもったいないだろう」

白石「他の作品は揃ったのか」

柳田「あとはあれだけだ」

白石「絶対に完成させる。お前が死んだら俺が個展の会場でスイッチを入れてやる」

柳田「（笑って）……」

白石「報道関係に送る声明文もできた」

柳田「気が早いな」

白石「声明文があれば俺たちのテロの意識が認識される。後々まで歴史の教科書にこのことが載る。記憶から消し去られても記録として残る」

柳田「…」

白石「テロルが惹き起こす結果は大抵自分自身の理想的なイメージネーションを裏切っていく。そのことを想像できる者は結局それを実行しない。だから若者にしかテロはできない。…そんなもんじゃないだろ」

柳田「(酒を含む)…」

白石「迷ってるのか」

柳田「迷いはない。あれは、初めて自分で納得できる柳田周の作品になる」

○道

工事現場の表で、通行人の交通誘導をしている制服姿の朝雄。「急いでんだよ！」などと通行人に罵倒され、「申し訳ありません。ご迷惑をお掛けしております」と、何度も頭を下げながら働いている。

○カラオケ屋

エプロンをした優樹が皿洗いなどして働いている。

同僚の店員「あんた簡単な飲み物とか食べ物作れる？」

優樹「ゼンゼン大丈夫です。前に居酒屋の厨房やってみましたから」

同僚の店員「(冷凍パックの袋を投げ)じゃこれ頼むわ。冷凍もん

だから袋に適当に書いてあるし。飲み物の分量とか作り方はここね、ここに貼ってあるんで」

優樹「了解です。喜んで」

同僚の店員「喜んではいらないから」

優樹「はい」

そこに、厚手のベンチコートなどを着て大きなスポーツバッグを提げた朝雄が入ってくる。バッグからは交通誘導の赤色灯が覗いている。

同僚の店員を押し退けるようにずかずかと優樹に近寄り、

朝雄「休憩時間とかねえの？」

優樹「どうしたのそれ？」

朝雄の坊主刈りの頭には、さらに異様な剃り込みが入っている。

朝雄「よくな？（同僚店員に振り向き）ってかここ休憩時間とかないの？ 買ってきたアイス溶けちゃうし」

同僚の店員「あ、（優樹に目を逸らし）いいよ、5分くらい」

朝雄「5分じゃクソしたら終わっちゃうじゃん」

同僚の店員「（朝雄を見ないようにしながら）20分ぐらい？ さ

っきの俺作っとくし」

朝雄「あざーす」

○同・表

寒い中に並んで座り込み、甘そうなアイスを食べている朝雄と優樹。優樹は手にした紙に目を落としてブツブツと呟いている。

朝雄「軽くやってみっか」

紙には朝雄が考えた漫才ネタが書いてあり、その練習を始める二人。朝雄は既に暗記しており、紙を見ながらツッコむ優樹とでも絶妙の間合いを作り出す。笑える小ネタだが、しかしそれは、かなりブラックな放射能（或いは原発）ネタ。

優樹「いや面白いけどさ、これってヤバくない？」

優樹を見る朝雄。優樹黙る。

弁当が二つ入ったビニール袋を提げたいつかだが、店に入っていく。

立ち上がる優樹。

朝雄「もう一個食う？」

優樹「え」

朝雄「（コンビニの袋からもう二個アイスを取り出す）寒いからゼンゼン溶けてねえし。ってか中で甘いもん食えなかったじゃん。俺太っちゃうかも」

○同・中

いつかの個室。いつかがひとり、選曲しているところに、飲み物を持った優樹が入ってくる。

優樹「お待たせいたしました。レモンチューハイです」

いつか「…（優樹を見て）あれ、新しいヒト？」

優樹「あ、はい。最近入ったんで」

いつか「…なんか、その中途半端な髪形かわいいね」

優樹「（笑って）あざす。他に「注文は？」

いつか「あとで、また」

優樹「はい、ではまたそちらのボタンをお押し下さい。失礼しま

ーす」

いつか「（出て行くこうとする優樹に）いくつ？」

優樹「…は？」

いつか「…いや…いい」

優樹「…失礼します」

笑顔を残して優樹が出て行き、いつかがひとり。

○道に止められたワゴン車

車内。圭を含め10人くらいの若者が息を潜めて後部スペースにいて。

助手席の久保田の携帯が震える。

久保田「うん…間違いねえな…（電話を切ると）行くぞ」

後ろの若者たちの中の数人が目出し帽などをかぶる。

ドアがバタバタと開かれる。

○ファミリーレストラン

桜がひとり座って、プリントアウトした柳田の住所を前に、携帯の地図を見ている。

そこに入ってくる、久保田を先頭にした一団。その中にいる圭。

桜「（そちらに目をやり）…」

一団は、速足で迷うことなく隅のテーブルに向かう。

そこには黒いスーツに身を包んだ中年の男が一人、その向かいに同じようなスーツ姿の若者が二人座っていて。

一団は素早くそのテーブルまで来ると、それぞれが手にしていた棒や金属バットで、即座に若者二人を叩きのめす。その間に久保田が乱暴に黒いスーツの男を殴り、三人がかりで引きずるように連れ去る。一気に走り去る一団。全て無言。あつという間の出来事。血塗れで転がっている若者二人。客や店員は誰も動けない。

桜「…」

○とある部屋

ほとんど何もないマンションの一室。

鍵が開けられ、久保田を含む4、5人が、目隠しをした黒いスーツの男を連れて入ってくる。その中に圭もいて。

隅に置いてあった椅子に手早く男を縛りつけていく久保田たち。

呆然と見ている圭に近づく久保田。

久保田「(部屋の鍵を手渡し)お前、こいつ見張ってる。絶対に口
ープほどくんじゃねえぞ。クソションベンもこのままさせろ。なんかあったら俺の携帯に電話してこい。俺にかける以外に携帯使うな。余計なところにかけて余計なこと喋るんじゃない。全部片ついたら金渡してやるよ。いいな」

圭「…(頷く)」

出て行こうとする久保田たち。

男「目隠しはもういいだろ」

久保田の仲間「うるせえ！」

と、男に近づこうとするのを抑え、久保田が男に金子勲(44)に近づいてその目隠しを外す。

久保田「金子さん、よく覚えといてくれよ俺の顔」

金子「覚えとくと何かいいことでもあるのか」

久保田、仲間を促し出て行く。

残される圭と、鼻と口から血を滴らせた金子。

○柳田の家・表

桜が来る。少し入り口の前で家の様子を窺い、やがてドアフォンがないのに気づくと、扉を叩く。

ややあって、扉が開き柳田が現れる。

柳田「…何だ」

桜「…驚かないんですね、私が増えても」

柳田「忙しい。帰れ」

と、扉を閉めようとするのに、

桜「どうして私の作品壊したんですか」

柳田「…作品…あれが作品か」

桜「…」

柳田「二度とここには近づくな」

桜の目の前で扉が閉じられる。

桜、去ろうとするが立ち止まり、バッグから取り出した煙草に火をつけて柳田の家を振り返る。

大きなスポーツバッグを肩から斜め掛けにした朝雄が通りかかる。小さな機械のようなものを手にして、歩きながらそれをあちらこちらに向けている。

○同・中

奥の作業場で、脱ぎ捨ててある防護服を身につける柳田。目は真っ直ぐに、完成間近の作品を見つめていて。

○同・表

朝雄の手にした機械が音を立てて反応している。それは、柳田の家の、奥の作業場の裏側あたり。

充分にはその機械を使いこなせないらしく、朝雄はそれをちよっと振ってみたり、首をひねりながらディスプレイの数字を眺めたりして、その様子を見つめる、桜。

○未夢のアパート

未夢が座って、じっと携帯を見つめている。

ドアチャイムが鳴る。

朝雄の声「俺―」

慌てて携帯をテーブルの下に隠すと立ち上がり、ドアを開ける未夢。

朝雄「(入りながら) 4号機どうなってる？」

未夢「は？ ヨンゴーキ？」

朝雄「(リモコンでテレビをつけチャンネルをいじる) 4号機だよ

4号機。事故った原発の4号機ヤバイじゃん。この時間

ニュースやってやってないんだっけ(テレビを切る)」

未夢「…」

朝雄「ってかさ、(手にしていた機械を見せ) これ何だか知ってる？」

未夢「あのさ、アタシ、バイトですっごい疲れてて今寝てたところ

なんだけど」

朝雄「ガイガーカウンター。事務所にあっただから一瞬借りてきち

やった。で、ヤバイんだよ、そのへんパトロールしてた

らさ、その先の、あっちのところでさ、すっげえなんかピ

ーピー言っちゃってさ。マズイよ、あそこ。今度通報し

よ」

未夢「なんであんたがそんなことすんの」

朝雄「いや子どものためにはさ、環境よくねえとダメじゃん」

未夢「…」

朝雄「もう一回子ども作んなきゃいけないからさ、お前もあれだ

よ、ヒバクとかするとヤバイじゃん。母体からうつっち

やうんだよ」

未夢「…」

朝雄「寝ていいよ。寝ろよ。ってか俺も昼夜両方シフト入れても
らってんだけどさ。ゼンゼン眠くなんねえんだよな。エ
ッチしよーか」

未夢「ふざけんなよ」

朝雄「ふざけてねえし。一生懸命働いて金稼ごうとしてるし。っ
て行くわ。仕事」

ドアに向かう朝雄。

靴を履く朝雄に、

未夢「…ご飯とか：ちゃんと食べてる？」

朝雄「なんか甘いもんばっか食っちゃうんだよな。コンビのキャ
ラとしては俺が肥ったほうがいいかもだよな、あいつが
ちよっとイケメンだから。あ…」

未夢「…なに」

朝雄「電話とか：先生とか警察来たりとかしてね？」

未夢「ないよ。だって知らないでしょアタシのこと」

朝雄「…そうか」

出て行く。

そのまま佇む未夢。

テーブルの下の携帯が鳴る。

取り上げる未夢、着信表示を見て一瞬躊躇うが、出
る。

未夢「はい」

山口の声「あ、どうも保護司の山口です。いま大丈夫？」

未夢「はい」

山口の声「やっぱりあれかね、朝雄君、そっちには全然来てない
かな？」

未夢「来てないです。前にも言ったけど、あいつが入る前に別れ
たから」

山口の声「でもほら、あなたお子さん生まれたじゃない。やはり
朝雄君としては会いたいんじゃないかと思うんだよね」
未夢「関係ないと思いますよ。ムカシから漫才のことしか考えて
なかったし」

山口の声「そうか：ごめんね、またこっちからも電話してみるけ
ど、なんかあったらすぐに連絡頂戴ね」

未夢「はい」

電話を切る。その待ち受け画面に現れる、生まれて間もない赤ん坊の写真。

○いつかのアパート

いつかが戻ってくる。

部屋中に並べられた、遥の絵。全てが「津波」。

いつか、それを片っ端から破っていく。

いつか「…」

テーブルの下に遥がいないのに気づく。

いつか「…」

奥の部屋を覗き、トイレを開ける。

そこにいる遥。

いつか「…」

殴る。無言で遥を殴るいつか。

キッチンの蛇口から、ゆっくりとしたリズムで洩れ滴る水滴。

○とある部屋

椅子に縛り付けられたままの金子から離れて圭が床に座り、カップラーマンを嚙っている。

金子「顔の血、拭いてくれよ。痒くてしょうがねえんだ」

圭、金子を見ると立ち上がり、キッチンの水道でタオルを濡らす。

金子「冷たいじゃんかよ、そのままじゃ。さっきお前、湯沸かしたろ。頼むよ。ついでに温かいもん。日本茶ねえか」

圭、棚を見るがお茶はない。

金子「なきや白湯でいいや」

圭、その辺りにあった紙コップに薬缶から白湯を注ぎ、お湯で濡らしたタオルを絞って金子に近づく。

金子「先に飲ましてくれ」

圭、コップを金子の口元に持っていく。ごくごく

音を立てて金子が白湯を飲む。

金子「…お前、この辺じゃ見ねえよな」

圭「黙ってるよ」

紙コップを床に置き、タオルで金子の口元を拭いていく圭。

金子「黙ってる？ 黙ってるってお前、誰に向かってもの言ってるかわかってんのか」

圭「…縛られて動けねえただのオッサン」

金子「(笑って) うまいね。だよな。…痛えよ」

金子の口元にこびり付いた血を丁寧に取っている圭。

金子「そうか、最近年少から逃げた奴らがいたってひよっとして

お前ら？」

圭「…」

金子「なんかお前のそれって、狙いのスキンヘッドじゃねえもんな。全然似合ってるねえし」

拭き終わって金子から離れる圭、水道で丁寧にタオルを洗う。

金子「俺らの中にはそういう情報全部入ってくんだよ」

圭は金子に背を向け床に横になると、携帯で電話をかけ始める。

金子「あんなアタマの悪いガキのとこいねえでウチ来いよ。な」
何度も繰り返し、発信履歴を押しては同じ番号にかける圭。

金子「それさ、お前昼間っからずーっと同じとこに電話してんだろ。指の動きでわかるんだよ。どこに電話してんだよ」

答えずに目を瞑る圭。

金子「よお、誰だよ。俺が聞いてんだろ。よお」

圭、動かない。

金子「…余計なとこに電話してるとあのバカに怒られんぞ」

圭「姉ちゃん」

金子「…姉ちゃん」

圭、床に丸めてあった毛布にくるまり、固く身を縮める。

金子「…」

パッキンが緩んでいるのか、キッチンの蛇口から、
ゆっくりとしたリズムで水が滴っていて。

○いつかのアパート（朝）

キッチンのテーブルに上体を投げたまま、目を開けて
いるいつか。服は昨夜のまま。

テーブルの下で丸くなって眠っている遥。

いつかの眼は、自分が破り捨てた遥の絵に向けられて
いて。

立ち上がるいつか、それらを拾い集め始める。

そしてそれをゴミ袋にまとめて突っ込むと、眠って
いる遥を起こし、椅子をキッチンシンクのところま
で持ってきてその上に立たせ、水道を勢いよく出し
て歯を磨いてやる。

いつか「アーンして。もっとおっきく」

裏側まで丁寧に、時間をかけて…。

○弁当屋

店の裏でいつかが休憩している。ぼおっと何かを考
えていて。

佐々木がエプロンを外しながら来て、

佐々木「交代、いい？」

いつか「あ、すみませんでした」

中に入ろうと、

佐々木「大丈夫？」

いつか「え？」

佐々木「いや、なんか…」

いつか「…子ども学校に入れるって、やっぱり住民票とか戸籍謄
本とかそういうの全部いるんですよね」

佐々木「…小学校は義務教育だから、住んでるとこの役所からだ
いたい通知が来て…」

いつか「障害とかあるとやっぱり難しいですよね」

佐々木「…遙ちゃんって生まれたときから…」

いつか「あの日から急に聞こえなくなったみたいで…」

佐々木「あの日？」

いつか「いや…（中に入りかけて留まり）店長、お金貸してもらえませんか？」

佐々木「いいけど…（笑いを浮かべ）あまりたくさんは…」

いつか「いくらなら大丈夫です？」

佐々木「あのさ…ひよっとして逃げてきたとか？ いやほら旦那のDVとか借金とか…そういうのから、なんか…」

いつか「逃げてやり直そうとか思っちゃいけませんか？ 逃げてゼンゼン別の人になりたいとか思っちゃいけませんか？」

佐々木「いや、いけなくは…」

いつか「妊娠したんだけど、って言ったらどうする？ この間だつて中出ししたじゃん」

佐々木「あ、いやそれは君が…」

いつか「いくら出してくれる？」

佐々木「あ…いや…（笑いが強張って）」

店の方から「すみませーん」と客の声。

いつか「はい、すみません今うかがいます！…（佐々木に）嘘ですから。全部」

中に入る。

〇XX造形芸術大学・教室

桜が、何もない作業台の前に座っている。

他にそれぞれに自分の制作に手を入れたりしている10人程の学生がいるところに、2、3人の別の学生がやってきて、「柳田臨時休講だつて」「マジ」「なんだよそれ」…などということになり、学生たちが声を掛け合いながら私物を持って部屋を出て行く。誰も声をかけずに、ひとり、残る桜。

〇とある部屋

圭が、紙コップを尿瓶替わりにして、縛り付けたままの金子の小便を取ってやっている。音を立てて紙コップの中に注がれる小便。

金子「お前さ、祖父ちゃんの介護とかやったことあんじゃないの」

圭「身内はないから」

金子「姉ちゃんがいるだろ」

圭「…」

紙コップの中身をトイレに流しに行く。

金子「どこにいんだよ」

圭「津波で行方不明」

金子「津波とか知らねえよばかやろう、半分くらい日本人死んじ

まったほうがすつきりすんだろ」

口を縛ってあったゴミ袋を開けると紙コップを捨て、

再び元のように縛る圭。

金子「…姉ちゃんが心配でお前、脱走したのか」

キッチンに凭れるように座り込み、金子を見つめる

圭。

金子「生きてたらいいな」

圭「…」

ガスコンロにかけていた薬缶が音を立てる。圭、立

ち上がる。

金子「向こうで何してたの？」

圭「(2つの新しい紙コップに白湯を注ぎながら)結婚して、子どもが一人」

もが一人」

金子「いくつ？」

圭「四つ…五つかな」

金子「ばか、姉ちゃんだよ」

圭が、紙コップを持って金子の傍らに近づく。

圭「…二十一」

金子「若っ…」

圭「施設出てすぐ結婚した」

金子「ちよっと、手だけほいでくれ。自分で飲むよ。施設って

孤児院か。姉弟二人きりなのか」

圭頷き、金子の手を縛っているロープを解いていく。

金子「養護施設育ちなんか珍しくもなんともねえぞ。俺んとこ来てみ、そういうヤツばっかなんだから。お、すまん」

解放された手で圭から紙コップを受け取り、白湯を飲む。

金子「あぢっ」

と、コップを取り落として口を押さえる。

圭は慌ててタオルを取りに走り、金子の口元に当てようと；その瞬間金子の手が伸びて圭の頭を押さえつけ、頭突きが入る。立て続けに。鈍く固い音が響き圭が倒れ込む。

それを見降ろしながら足を縛ったロープを手早く解く金子。一瞬身体をほぐすと、呻いている圭のポケットから携帯を取り出し、番号を押しながらドアへ向かう。

金子「俺だ；今から戻るからよ；え？；だから今から戻るつってんだよこのタコ！；」

ドアの鍵が外から開けられ、久保田の仲間が数人雪崩れ込んできて金子に掴みかかる。纏れ合って倒れ込む金子に蹴りが入る。頭を抱え腹を折る金子を引きずるように椅子のところまで連れてくると再びそこに縛り付ける男たち。

久保田が携帯を拾い上げ、通話を切る。

仲間の一人が圭の髪を掴んで顔を上げさせる。

久保田「絶対に逃がすなって言ったよな」

呻く圭。

久保田から受け取った携帯を見ながら別の仲間が、別の仲間「お前、これ、どこに電話してんだ」と圭に詰め寄る。

金子「(血塗れの顔で笑って)姉ちゃんだよ。実の姉弟の」

圭「……」

金子「(プツと噴き出し)こいつら姉弟でオマンコしててよ。それで百回も二百回も電話してよ。姉ちゃん、姉ちゃん、つて泣きながらセンサー搔いてたよ」

一同の眼が圭に注がれ、金子の笑いが昂まる。

久保田「(圭に) 立て」

圭「…」

久保田「立て！」

よろよろと立ちあがる圭。

久保田「今度逃がすような真似したら、こいつと一緒に前も殺

すぞ」

圭「…」

金子の痙攣的な笑いが続いていて。

○カラオケ屋・個室

いつかが、古い傷だらけのほうの携帯をいじっている。保存してある伝言メッセージを、開く。男の聲が流れ始める。：「あ、俺です：」：躊躇っているような、不安を押し殺して泣きながら笑っているよ
うな：それはいつかの夫Ⅱ各務泰志(39)の声：「大丈夫かな：どこにいるんだろうね：あの：やっぱり諦めきれないんだよね：絶対君と、遥が、どこかに生きてるって思ってたんだよね：こうやって携帯も繋がるしさ：やっぱり：毎日毎日：」：切れる。いつかが次のメッセージを開く。：「俺です：また電話しちゃいました：今日やっと兄貴の店の片づけが目途ついてさ：再開したら俺もここで働くことになっ
てんだけど：それはまだちょっと先だよね：遥：元気かな：病気とか：」：切れる。いつかが、煙草に火をつけ次のメッセージを開く：。

優樹「(ドアを開け) 失礼しまーす」

急いで携帯を切るいつか。

優樹「ウーロンハイと、ポテトフライお待たせしました」

いつか「(笑顔で) …どうも」

優樹「いつもお一人なんですね」

いつか「…」

優樹「あ、すみません。他に：」

いつか「あんたも飲まない？」

優樹「いや、ちょっと」

いつか「だよ。冗談」

優樹「…（出て行こうとして）俺、漫才やってて」

いつか「あ…そうなんだ」

優樹「一瞬聞いてもらっていいですか」

いつか「聞かせて聞かせて」

優樹「ホントはコンビなんで一人でやっても面白くもなんともな

いかもですけど…えー…じゃいきます…」

外の方で「いらっしやいませー！」という大きな声
が聞こえる。

優樹「あ、すみません、ちょっとお客さん来ちゃったみたいなん
で。また時間のあるときに」

いつか「…うん」

優樹「また、絶対」

いつか「OK、絶対」

優樹が出て行く。ひとり残る、いつか。

○柳田の家・裏

ピーピーと反応しているガイガーカウンターを手に、
携帯をかけている朝雄。

朝雄「ってかだからなんでちゃんと調べに来ないわけ？ 意味わ
かんないんだけど。こうやってピーピーピーピー鳴って
んじゃん…だから俺が誰だっかっていいじゃん、なんで…わ
かったから聞いたからそれはもう…無視かよ、もういい
よ！」

乱暴に切った携帯を地面に叩きつける。

朝雄「…」

携帯を拾い上げ、立ち去る。
別の一角で、じっとそれを見ていた桜。

○未夢のアパート

未夢がドアを開け、朝雄が入ってくる。

朝雄「携帯壊しちゃった」

と、床に放り投げる。

朝雄「お前の貸してくんね」

未夢「…」

朝雄「それマズいよな、やっぱ。お前のなくなっちゃうじゃん」

未夢「…うん」

朝雄「あの家に火つけちゃおうかな」

未夢「…」

朝雄「いや、火とかつけると警察とかみんな来るじゃん。あの家

なくなんじゃん」

未夢「(じっと朝雄を見つめ)…なんの、話？」

朝雄「エッチする？」

未夢「…いいけど」

朝雄「希望的には女の子だったんだけど男でもいいや」

未夢「だよね」

朝雄「…仕事行くわ」

未夢「…うん」

ドアに行きかけて立ち止まり、ポケットからクシヤクシヤになった7、8枚の千円札を取り出し、5枚

未夢に差し出す。

未夢「…ありがと」

朝雄「ってかちよっとずつだけどそれ貯めといてくんね」

未夢「…うん」

朝雄「将来のためによ(笑う)」

出て行く。

未夢「…」

○柳田の家・表

桜が煙草を喫いながら、じっと入り口を見つめている。

柳田が出てくると扉に鍵を掛け始める。

その動きが、さらに疲労感を帯び緩慢になっていて。

桜「…」

○ブティック

桜が服を買い、ゴールドカードで支払いをする。

○高級ホテル・トイレ

買った服に着替えた桜が、鏡に向かってメイクをしていく。

○同・バー

桜が入ってくると、真っ直ぐに柳田と白石の座っているブースに歩み寄る。

気づく柳田。

桜「いいですか、座っても」

白石「…（桜と柳田を見比べ）」

桜「（白石に）初めまして。柳田先生に美術を教わっている学生で

村上桜と言います」

白石「（微笑み）柳田の友人の白石です。どうぞ」

座る桜。

立ち上がる柳田、ふっとよろけるのを、桜についてきたフロントマネージャーが支える。

桜「どうして私の作品を壊したんですか。いつも答えて頂けないので」

柳田がフロントマネージャーを手で制し、去らせる、柳田「いい気になるな。お前は何かをわかっている気になってる。

だから人の作品を観て冷たく笑う。俺はそんなお前の笑いに虫唾が走る」

歩き去ろうとするのに、

桜「（静かな声で）先生のお宅の裏でガイガーカウンターが反応しています」

柳田と白石が目を合わせる。

桜「先生は何をやってらっしゃるんですか？ 先生の作品と、ガイガーカウンターと、先生の最近のご様子にどんな関係があるんですか？」

柳田「…」
去る。

桜「…」

白石「僕は放射能の専門家ですね」

桜「(白石を見る)…」

白石「ガラス固化体ってご存知ですか」

桜「いえ」

白石「放射性物質を保管するために、ガラスのような状態にして封じ込めておく。その技術はまだ未熟とされているんだが僕にとっては完成してる。僕には可能なんだ。ただ僕の技術は認められていない。(笑って)いわゆる原子力ムラから疎外された人間なんでね。僕はそれを、僕が作ったガラス固化体を柳田に提供した。彼はそれで作品を作っています」

桜「…」

白石「(手で球体の形をつくり)封じ込めているけれどもそれは、ちょっとしたショックを与えてやることで一気に飛散する。この間の原発事故など比較にならない」

桜「…復讐、なんですか」

白石「彼はこれまでもずっと、世界と、闘い続けてきたんだと思います。柳田周は、それを最後まで全うしようとしている。

…さっきのあなたの問いへの答になりましたか」

桜「でも…それって…」

白石「僕がこうやって全てをあなたに語ったのはどういうことだと思えます？ あなたの口から誰かにこのことが洩れたと知ったら、そしてそのことによって僕たちの計画が失敗したら、僕はあなたを殺してしまうでしょう」

桜「…」

白石「柳田はもう死にます。おそらく、個展の前に」

○柳田の家・表

桜が来ると、扉を叩く。
ほどなく開き、柳田が現れる。強引に中に入っ
ていく桜。

○同・中

個展の作品が並べられたアトリエ空間。
入ってくる桜に柳田が従うように。

桜「ガラス固化体の作品ってどこですか？」

柳田「…（奥のドアを示す）」

桜「あれが…タイトル？」

奥の作業場に続くそのドアに、『OVER THE RAINBOW』
と大きく描かれてある。

柳田「そうだ」

桜「虹の彼方に…」

柳田「…」

桜「先生はもう学校もクビになりますよ。誰も助けしてくれない。

家族もいなくなった。ひとりで死んでいくんだ。世界を
巻き込まずにひとりで死んでいけばいいんだ」

柳田「もう帰れ。俺みたいな年の人間と君では放射線の影響は全

然違う」

桜「…個展なんかできなくしてやる」

傍らにあった金属製の棒を掴むと、次々にその場の
作品を叩き壊し始める。

じっと、桜を見つめている柳田。

碎け散っていく作品たち。

桜「私は何をすればいいんだよ！ どう生きればいいんだよ！
わかんないんだよ！ 淋しいんだよ！ 愛なんかない
…愛なんかどこにもない！ みんな自分のことばかり
考えて…ひとりで孤独を抱えてる人間のことなんか誰
も考えない！ パパだって何もわかってない！ 愛な
んかどこにもない！」

泣きながら、柳田の作品を粉々にしていく桜。

桜「淋しいんだよ！…」

身体を震わせながら柳田の胸に縋りつく桜。

柳田がそれを受け止める。

桜「苦しいんだよ…憎いんだよ…嫌いなんだよ…いやなんだよ全

部…全部嫌なんだよ！」

柳田が、桜の肩を抱きしめる。

柳田「…愛は最後にやってくる…愛が蘇るのは、ほかの人間らしい気持ちですべて戻ってからのことだ…愛は…最後に蘇るんだ！」

嗚咽する…嗚咽が止まらない、桜。

○同・表

裏手の角。新聞紙などを丸めて置いたところに、朝雄がライターで火をつけようとしている。ライターの具合が悪いようになかなか火がつかない。

傍らでピーピーと鳴っているガイガーカウンター。柳田に送られ扉から出てくる桜がそれに気づく。

火がつく。

朝雄「…（笑う）」

金属棒を持って走ってきた桜が、飛び掛かるようにして朝雄を殴りつける。

身体を丸める朝雄。さらに殴りつける桜。転がるように走って逃げる朝雄。

桜はそのままガイガーカウンターまで叩き壊し、上着を脱いで火を消し止める。

傍らに柳田が立っ

柳田「…」

桜「…」

○未夢のアパート・表

朝雄が走ってくる、未夢の部屋のチャイムを鳴らす。ドアノブを引っ張る。ドアを叩く。

朝雄「引越すぞ！ 明日引越すぞ！ おい！ 明日引越すから！」

隣の部屋のドアが開き隣人が顔を出す。

隣人「あの：昼間っつーか、さっき、引越し屋来てましたけど」
振り返る朝雄。頭から血を流し、しゃくりあげるように泣いている。

○小さな小児科医院・診察室

遥を抱きかかえて医師の前に座っているいつか。

医師「いや：やっぱりこれは大きな病院に行ってちゃんと診てもらったほうがいいと思うんですね。聴こえなくなるとうのはいろんな要素があるわけで。ウチじゃあちよつとこれ以上お母さんの質問にはね、お答えできないというか」

いつか「：そうですか」

医師「どうかこれ：最近いろんなところからうるさく言われているんであれなんですけど：お子さんちよつと身体に痣が多いというか：」

いつか「(笑って)この子やっぱり耳が悪いんで私が注意しても聞こえなくてしょつちゅういろんなとこにぶつかつちゃうんですよお」

○同・受付

診察料を払っているいつか。

いつか「今日ちよつと急いでたんで保険証忘れちゃって」

事務員「はい、じゃあ今度いらつしやつたときで」

いつか「(診察室の方を気にしながら) はい必ず」

事務員「でも申し訳ないですけど今日はこちらになつちやうんですよね(と、請求書を出す)」

いつか「あ、はい(財布を出して)」

診察室から医師が顔を出しこちらを覗く。

いつか「(そちらを気にしながら、抱きかかえた遥に)今日はこれ

からおいしいもの食べに行こうねー」

○カラオケ屋・個室

いつかと遙がいて。

優樹「(ドアを開けて)お待たせしましたー。レモンチューハイとピラフとポテトフライです」

オーダーを並べる。

優樹「(笑って)お子さん、っすか」

いつか「なんだ子持ちのおばちゃんかよ、って顔した」

優樹「そんなことないっす」

いつか「した」

優樹「他になんか…」

いつか「セックスする？」

優樹「…は」

いつか「エッチしようか」

優樹「(ふ、と遙に目をやる)…」

いつか「大丈夫この子耳聴こえないから」

優樹「…」

優樹、遙の前にしゃがみ込むと、その目の前であやすように手を振ったりする。

いつか「…私はいつも物欲しげなオッサンとしかエッチできないのかよ！(頭を抱える)」

優樹立ち上がり、少し会釈をして出て行く。

優樹「今日もちよっと忙しいんで、ネタ聞いてもらえないっすけど。すみません…」

いつか「…(顔を上げる)」

扉が閉まる。

いつか「…」

遙がピラフを食べ始める。

いつか「あいつ、どんな漫才やるんだろうね…(遙に)あんたさ、ホントに耳聴こえないんだよね。だって津波の前とかさ、テレビのくっだらな番組見てげらげら笑ってたじゃん…」

ピラフを食べている遥。

いつか「…聴こえてんでしょ…あんた、ホントは全部聴こえてんでしょ…」

ゆっくりといつかの手が伸び…ピラフを食べる遥の髪に触れそうになって…そこで、止まる。

いつか「…」

○XX造形芸術大学・学長室

大きなデスクを挟んで村上と柳田。

椅子に座っている村上の前には柳田の「辞職願」。

立ったままの柳田。

柳田「これで、これ以降一切私と大学とは関係ないということだ」
村上「僕はあなたを辞めさせることを強硬に訴えてきました」

柳田「…」

村上「わかって頂けると思いますが、それは決して、娘の件が理

由じゃない」

柳田「わかっています」

村上「僕は…あなたに嫉妬しているのかもしれない」

柳田「…」

村上「僕はずっと自分自身の表現に猜疑心を持ち続けてる。どんなに売れてもどんなに評価されても…僕自身は僕の表現を信じていない。…あなたが、羨ましい」

柳田「…」

頭を下げ、去ろうとする。

村上「娘はずっと、あなたのことが好きなんです。どうか今後も指導してやっていただけませんか」

柳田「申し訳ないが、もうそれはできません」

村上「…残念です。個展、期待しております（立ち上がり深く頭を下げる）」

柳田、去る。

○同・表の廊下

柳田が出てくる。

廊下の奥から、付き添いの押す車椅子に乗った牧野が来る。

柳田「…」

牧野「顔色が悪いな」

柳田「もう個展はできなくなりました」

牧野「…」

柳田「作品を壊してしまいました」

牧野「自分でか」

柳田「(笑って) そんなようなものです」

牧野「あんたらしい」

柳田「ひとつだけ残りました。私の最後の作品です」

牧野「爆弾か」

柳田「…」

牧野「あなたの最後の作品は爆弾に決まってる」

柳田「(笑う)…」

牧野「完成したのか」

柳田「ほとんど」

牧野「身体には気をつけろ」

柳田「長い間、お世話になりました」

深く礼をして、背を向け歩き出す。

牧野「柳田周！」

柳田「(振り返る)…」

牧野「頑張れ！」

○弁当屋

大きな釜で米を研ぎ、作業台に置くいつか。

そこに置いてある『アルバイト募集』の張り紙に気づく。

いつか「…店長」

佐々木「(奥で) はい」

いつか「この…張り紙」

佐々木「あ、いや…すぐにどうこうってわけじゃないから…(へ

らへらと笑い) まだ全然いてもらって構わないですから。
ゼンゼン」

いつか「…」

○柳田の家・中

戻ってくる柳田。奥へと続くドアの前まで来る。
ドアに描いた『OVER THE RAINBOW』の文字。

柳田「…」

鍵を回し、ドアを、開ける。

○カラオケ屋・個室

いつかがひとり、選曲している。

優樹「(ドアを開け) すみません」

いつか「…?」

優樹「すっごい混んじやあって…若い男の常連さん二人なんです
けど相席っていうか、ダメですか」

いつか「…」

優樹「(笑って) あとで僕もちょっと参加しようかな、みたいな」
いつか「…いいけど」

優樹「あざす!…(外に) じゃあこちらで」

入ってくる、今っぽいオシャレな若者二人。

若者A「すみません、なんか急に」

いつか「(笑い) いえ」

若者B「盛り上げんのは得意なんでー」

○柳田の家

慎重に、防護服を着る柳田。

○カラオケ屋・個室

いつかが若者二人と盛り上がっている。

テーブルには酒やつまみが山盛りで。
ふらついて酒を零してしまっつか。
若者たちが笑いながらそれを拭く。
その手が微妙にいつかの太腿などに触れていて。

○とある部屋

キッチンに凭れて座り込んでいる圭。
椅子に縛られたまま鼾をかいて眠っている金子。
圭の指が何度も何度も携帯の発信ボタンを押す。
蛇口から洩れ滴る水滴。

○柳田の家

奥の作業場。
柳田が作品の完成に向かってしている。一心に。
額の汗。作品に触れる指先。

○カラオケ屋・個室

かなり酔った様子のいつか。グラスを片手に、
いつか「(うわ言のように)何台も：何十台もの車が流されていく
：車だけじゃない：家も：人も：ぐるぐるぐるぐる回
ったりしながら：流されてく：何も聞こえない：何も
継るものがない：流されてく：私も流されてく：」
やはりグラスを片手に、酔眼をいつかに向けている
若者二人。
いつか「(時折酒を含みながら)水を飲んだ：なんだかわからない
ものをいっばい飲み込んだ：息ができなくて：鼻の奥
が痛くて痛くてたまらなくて：目の前でこう、へんな格
好でくるくる人が回っていて：気がついたら病院で：
でもそこでもみんなが騒いでて：火事だって走り回って
て：私は走ってて：ぼんやり立っている人がいて：私は
走ってて：なんで走ってるんだろって思いながら走っ

てて：そしたらそこにずぶ濡れになった娘がいて：遥を抱きしめて：かかえて：また走って：走って：大きな虹が出てて：嘘みたいな虹が見えてて：逃げた：どこでもいいから逃げて：ふたりで：消えてなくなるうと思つて：」

酒を、飲む。

いつか「：空だよ」

若者B「：もう一回お姉さんのさっきの歌聞きたい（リクエストを入れる）」

若者A「（いつかのグラスに酒を注ぎながら）人生さ、悪いことばかりじゃないと思ひ、ます！」

いつか「だよねー」

その瞬間、若者たちがいつかに襲い掛かる：大きな音量でリクエストした曲のイントロが始まり：若者たちはいつかの服を引き裂き、抵抗する身体を押さえつけ、足を広げ：凌辱していく。

○柳田の家

『OVER THE RAINBOW』と描かれたドアが開き、防護服の柳田が完成した作品を抱えて奥の作業場から出てくる。

そこに置いてあった、小ぶりだが頑丈そうなキャリーバッグにそれを丁寧に収納する柳田、そのまま、倒れ込むように簡易ベッドに横たわる。

雨の音。

○いつかのアパート

雨の降っている音。

鍵が開けられ、いつかが戻ってくる。

頭からずぶ濡れ。羽織った薄手のコートの下は、引き裂かれた服が絡みついていて。

テーブルの下で、床に座り込んだ遥が絵を描いてい

る。

いつか「…」

バッグもコートも投げつけて近づく。遥を殴る。殴る。泣きながら殴るいつか…。

軽快な音楽が鳴る。

投げた拍子に口の開いたバッグから飛び出した古い傷だらけの携帯が鳴っている。

いつか「…」

鳴り終わる。

いつか「…」

ゆっくりとそれを取る。伝言メッセージが点滅している。開く。声が聞こえる。『俺です…生きてたんだね、やっぱり…やっと思つた…会いたいな…すぐに会いに行くからね…待っててね…遥…』…泰志の声…。

いつか「…」

いつかの財布がやはり口を開けて落ちていて。転がった小銭を、遥がゆっくりと拾い集めている。

蛇口から、ゆっくりと洩れ滴っている水滴。

○カラオケ屋

働いている優樹のところに朝雄が来る。

朝雄「同僚の店員を押し退けるように近づく」とあいつの実家行つた」

優樹「え」

朝雄「あいつ実家に帰ってて」

優樹「…」

朝雄「やっぱ子ども生まれてた。ジジイが入るなとか言うから殴り倒して無理やり入ったら、奥の部屋であいつが泣き喚いててさ。ババアが警察に電話とかしようとするからそれも殴り倒して奥に行ったんだ。したら何だと思う？」

優樹「朝雄くん…」

朝雄「あいつが包丁とか持ってガキ抱いててさ、近づいたらこの

子殺してアタシも死ぬとかって」

優樹「…」

朝雄「やっぱりバカじゃん。あいつは死んでもいいけどガキ殺したらヤバいだろっつーの。捕まっちゃうし、あいつ」

優樹「で、どうしたの？」

朝雄「帰ってきた。5千円置いて。積み立ててんだ、将来のために。あ、ってか結局女か男か聞きそびれちゃった」

優樹「…」

朝雄「ちよつと腹減ったな」

と、優樹が作っていたオーダーのポテトを食べる。

優樹「…練習、しようか」

朝雄「うん…（同僚の店員に）休憩いい？」

カクカクと頷く同僚の店員。

ネタを始めながら出て行く朝雄、優樹。

○同・表

出てくる二人…。

優樹「…」

通りの向うから、保護司の山口や数人の私服制服の警察が向かって来る。

優樹「朝雄クン」

朝雄「ん、ってそこはツツコミどこじゃないだろ」

優樹「逃げる」

と、朝雄を警官たちとは反対の方に押し飛ばし、自分分は警官たちのほうに向かっていく。

警官たちも気づき走り寄ってくる。それに盾になるように両手を広げる優樹。

優樹「逃げる！」

朝雄「…」

我に返ったように逃げ始める。

優樹を投げ飛ばす警官、そのまま二人がかりで道路に頭を押し付ける。

優樹「朝雄逃げる！」

残りの警察たちが朝雄を追いかける。すぐに捕まる朝雄。抑えつけられるが暴れ：

朝雄「ダメなんだって：俺にはガキがいたって：ガキには親父が必要なんだよ：二人で育てんだよ：二人で育てなきゃダメなんだよ：積み立てたって始めたし：ジャマすんなよ！」

振り切って道路に飛び出す朝雄。

優樹「朝雄お！」

ドンツ、という鈍い音。

優樹「…」

車にはねられた朝雄が道路に転がっている。

○とある部屋

キッチンに座っている圭。

金子「…シヨンベン」

顔も上げない圭。

金子「だよな」

ズボンの中にそのまま放尿する金子。

金子「(少し笑い)…姉ちゃんとの一番いい思い出聞かせてくれよ」

圭「…(顔を上げる)」

金子「なんかあんだろ」

圭「…」

金子「なかったら一番悪い思い出でもいいや：つーか、なんかないのか、こう、語りたくなるような思い出」

言葉が出てこない圭。

金子「…じゃ作れ、これから。俺が作らせてやるよ」

圭「…」

金子「マジな話しようか。…これ、長引いてんだろ。ホントは俺攫ったら半日でカタがつく話なんだよ。それがこんなに長引いてるってことはやっぱりあのバカたちの思うようにはゼンゼンなっていないっつーことだよ」

圭「…(金子を見る)」

金子「逆にもうあいつら殺されてるかもしれないぞ。で、ここの

場所がわかんなくて俺とお前だけ、なんか貧乏くじ引いてる、みたいなの」

圭「……」

金子「もうやめようぜ、ばかばかしい。財布は抜かれたけど上着の内ポケットに十万入ってる。これやるよ。足んなきゃ後で渡してやる。携帯貸せ」

圭「……」

金子「お前も早く姉ちゃん捜したいんだろ」

圭「……」

立ち上がり、金子に近づくとロープを解き始める。

金子「お開きだ」

手のロープだけ解くと、サッと金子から離れる圭。

金子「用心深いじゃんかよ」

足のロープを解き、立ち上がる。

金子「(上着の内ポケットから十万円を取り出し) 携帯と交換だ」

圭「……」

金子「そうか、それがなきゃ姉ちゃんに電話できねえよな、じゃあ一瞬貸せ」

と、札を床に置き少し離れる。

圭、用心深く近づき、札を拾う。その瞬間、金子が

圭の頭めがけて椅子を振り下ろす。砕け散る椅子。

崩れる圭。

金子「俺にズボンションベンさせた奴許すわけねえだろ」

呻く圭のポケットから携帯を奪い、札を再びしまい

ながら、

金子「姉ちゃん生きてたら俺が一発やっつてから売り飛ばしてやるよ(と、携帯の番号を押し始め) ……痛っ」

圭が金子の足に噛みついた。そのまま飛び掛かるよ

うに押し倒し金子の側頭部に頭突きを入れる圭、金

子が落とした携帯に手を伸ばす。その手に金子が噛

みつく。圭が蹴る。金子を蹴って引き離して立ち上

がる。荒い息で金子を見下ろす圭。

携帯を握り締めた手首に金子の歯型。血が滲んで。

金子「お前はもう死んだ…(笑いだす)」

金子「お前はもう死んだ…(笑いだす)」

金子「お前はもう死んだ…(笑いだす)」

圭「…」

金子「H I V って知ってるか。俺、そうなんだよ。もうお前もな」
圭、床に落ちていたロープを掴むと笑っている金子の首に巻き一気に締め上げる。

圭「…」

金子の身体から力が抜ける。
立ち上がる圭、急いでキッチンの水道をひねって手首を洗う。逆る水とともに、血が流れていく。

○弁当屋

大釜で米を洗っているいつか。客の気配に振り返る。
いつか「いらっしやいませ…」

そこに立っているのは、泰志。

泰志「久しぶり」

いつか「…あ…」

泰志「きつと生きてると思ってた。きつと会えると思ってた」
動けないいつか。

泰志「遥、ずいぶん痩せたね。って言うか、臭かったから着替えさせたら身体中痣だらけだった」

いつか「…」

泰志「大丈夫。やり直そう。大丈夫だよ。みんなで帰ろう」
いつか「…」

いつか、泰志から後退り、そのままの格好で店を飛び出す。

○道

走るいつか。

○いつかのアパート

鍵を開けて入ってくるいつか。
遥の姿を探す。

いつか「遥…遥！」

遥はいない。

部屋を飛び出す。

○XX造形芸術大学・階段

桜が降りてくる、と、目の前の通路を職員が走り抜け、その先で池澤と何事かを話し始める。緊迫した空気。：「柳田先生」：「警察」：という言葉が桜の耳に入る。

桜「…」

走り出す。

○街の一角・道

走る桜。

○別の道

走るいつか。

○さらに別の道

走る圭。

○柳田の家・表

桜が来る。扉が開けられており、警察が出てくる。

近づいていく桜。

警官の声が聞こえる：「いや本人はいないようで…」。

桜、再び走り出す。

○また別の道

キャリーバッグを引きながら柳田が歩いていく。
ハンカチを口に当て、少し咳き込みながら。

○ 圭が歩きながら携帯の発信を繰り返す

その手首に巻かれた汚れたハンカチ。
目の前にバス停がある。

圭「…」

○ 遥を探しながらいつかが走る

○ 柳田を探しながら桜が走る

○ バス・車内

バス停に停車し、圭が乗ってくる。
走り出す。

立つ圭のすぐ後ろの座席にキャリーバックを抱え目を閉じた柳田が座っている。

○ 柳田を探して桜が走る

○ バス・車内

バスが揺れ、柳田の姿勢がグラツと崩れて倒れ込む。

圭がそれに気づき、しゃがみ込む。

柳田は激しく喘いでいて。

圭「…ちょっと…（運転席に向かって）ちょっと止めて下さい」
走り続けるバス。

○ 桜を探して走るいつか

通りの対岸に遥が歩いている。

いつか「…」

○ バス・車内

柳田を抱きかかえている圭。

圭「…この人…死んじゃうよ…」

走り続けるバス。

○通り

いつかが叫ぶ。

いつか「遥！」

遥が振り返って、いつかを見る。

いつか「…」

遥がいつかに向かって笑い、道路に飛び出す。

いつか「遥！」

○バス・車内

圭が叫ぶ。

圭「止めてよ！ この人死んじゃうよ！」

バスが激しくクラクションを鳴らし急停止する。

バランスを崩し柳田に覆いかぶさるように転ぶ圭。

○走っていた桜が立ち止まる

○通り

停止したバスの直前の路上に、バスから守るように遥を抱いたいつか。震えながら、泣きながら、遥を力一杯抱き締めていて。遥が小さな手を差し出す。握りしめていた手を開くとそこに僅かの小銭と小さな菓子。

○バス・車内

運転士や他の乗客が後部に目を向けている。

柳田が息絶えている。

圭がゆっくりと立ち上がり、ふらふらと扉のほうに行く。

圭「降ろして：もらえませんか」

扉が開き、降りていく圭。

入れ替わりのように、桜が、乗ってくる。

○いつかのアパート

テーブルの脇の椅子に座った遥が、さきほどの菓子を食べている。

いつかがその傍らで煙草を喫いながら泰志にメールを打っていて：『さっきはごめんなさい。あまりに突然だったのでパニックになっちゃいました。もうちょっとでアパートに戻るので、迎えに来てもらえますか。遥と一緒に待ってます』：メールを送信し終えると煙草を消し、キッチンにいくつか転がっていた空のペットボトルにストーブ用の灯油を詰め始める。

携帯が鳴る。

泰志からの返信：『了解です。今からそちらに向かいます』：。

いつか「：（遥を見て微笑み）遥、お父さんが迎えに来るから、ひとりで待ってられるよね」

○カラオケ屋・個室

いつかが大きなバッグを脇に置いて選曲している。

扉を開けて若い店員が入ってくる。

店員「レモンチューハイとポテトフライお待たせしましたー」

いつか「：いつものヒトいないの？ 漫才やってる：」

店員「僕今日から入ったんでわかんないです。聞いてきますか？」

いつか「いや：いい」

店員「失礼しまーす。：あ、えーっとなんか他の：」

いつか「もういいよ」
店員「失礼しましたー」

出て行く。

いつか「…」

大きなバッグを開け、さきほどのペットボトルを取り出していく。

ポケットの中の、古い、傷だらけの携帯が鳴る。

いつか「…」

取り出して、出る。

いつか「…はい」

○街の片隅

圭が携帯を耳に当てている。

圭「…姉ちゃん…」

○カラオケ屋・個室

いつかが微笑んでいる。

いつか「圭ちゃん…いつも電話くれてたの圭ちゃんだよね。ごめんね、出なくて」

○街の片隅

圭が泣いている。

圭「姉ちゃん…会いたい…」

○カラオケ屋・個室

いつか「会おうね…ごめんね今まで…会おうね」

○街の片隅

圭「いつ会える？」

○カラオケ屋・個室

いつか「明日会おう」

○街の片隅

圭「どこで会う？」

○カラオケ屋・個室

いつか「駅で会おう」

○街の片隅

圭「どこに行く？」

○カラオケ屋・個室

いつか「どこに行こうか」

○街の片隅

圭「どこに行こうか」

○カラオケ屋・個室

いつか「どこか遠くに行こう。二人で」

○街の片隅

圭「どっか遠くだね。二人で行くんだね」

○カラオケ屋・個室

いつか「明日行くんだよ」

○街の片隅

圭「明日だね」

○カラオケ屋・個室

いつか「明日会うんだよ。そしてどこか遠くに行くんだよ。…う

ん、じゃあ明日、姉ちゃんから電話するから…うん、じ

ゃあ、明日」

電話を切る。カラオケの曲をセットする。ペットボ
トルの灯油を部屋中に撒く。イントロが始まる。ラ
イターで火を放つ。マイクを持つ。歌い出す。

○駅

柳田のキャリーバッグを引っ張って、桜が駅に入っ
ていく。

手首に真っ白な包帯を巻いた圭が、駅に入っていく。
大きな、嘘のような虹が、空にかかっている。

(了)

※引用

ヴァルラーム・シャラーモフ シリーズ『左岸』より「センチメンツィア」